(一) 清南海と米ケ森

昔、米ケ森を中山と呼んでいた頃のことという。きようもまた、中山の急傾斜を登つてゆく山伏がいた。どこから来たのか誰も知らないが、丈高く頑丈な体、ぼうぼうにのびた髯も髪も銀一色に垂れ下がり、その中に落ちくぼんだ眼だけがきらきらと光りただものと思われなかつた。

この老人こそ、清原武衡の後裔、清南海という山伏であつた。南海は宮田又沢川にそつた岩山の洞穴に端然と坐して、千日の木食の修行を続けた。その修行を終えた南海は、その後中山の裾野の清閑な丘に草房をつくり、中山の山頂に小さな祠をたてて中山大権現をまつり毎日登山しては国土安穏を祈り米を得た。

ある日、草房で書見していたが、疲れて目をあげた南海は一匹のイヌのあるいてくるのをみた、よく見ると眼は人のように澄んでいて美しかつた。イヌは南海を見て一声ほえたが、その声も全く人のようであつた。イヌは進んできて人間のようにお礼をした。南海は一目でこのイヌをひどく愛し、イヌも南海の徳をしたつてか離れなくなり、その日から南海とイヌの生活が始つた。イヌは毎日南海のあとになりさきになつて中山に登り、南海が登山できぬ日はかわりに登つて米を得ることができる程になつた。

それから数ケ月過ぎた頃、中山の蔭より「キーツ、キーツ」という鳴き声がするようになつた。ときには草房の近くまで来て木から木へ飛びあるく姿を見かけるようになつた。それは雌雄の猿で、南海の読経が始まると首をたれて聞き澄ますのだつた。これをみた南海は手をあげて招くと、二匹の猿は草房の縁に来て坐つた。南海は人にものいう如く「汝等も仏性あり、これより法に入りて来世は畜生道をのがれよ、イヌとともに我の徒弟にしよう、イヌと睦くして我に仕えよ」と言葉やさしくさとした。

始めの頃は、他国ものとして白眼視していた村人も、南海の徳にひかれて、中山権現に参る人が日増しにふえていつた。南海は不自由な山伏生活をしてきたためか、山菜を始め、芹、牛蒡等が好物であつたため、イヌ、猿を助手として畑を拓いて牛蒡を作り湿地を整理して芹を作つたという。

こうした法の平和な生活が続いて、南海はいつしか八十八才になつた。南海はこれを機に中山を「米ケ森」と改称することにした。八十八は縮めると米という字になることと、中山権現が米を授けてくれていたためという。南海は改名祝と、米寿の祝をひらくことにし、村人達を招き牛蒡、芹などを料理して盛大な会を催した。酒がまわるにつれて唄や踊りがとび出し、南海は琴を弾じて興をそえたという。